大船

が投入船大型化やスケジュール見直しを行ったことで延航の余裕が生まれたこともポイントとなり、9月末からの寄港が可能となった。寄港ローテーションは、

と。輸入が鉄類や肥料、コークスが中心で、震災前までの実績では実入りベースで輸出と輸入の比率は2：1で推移していた。川崎汽船としても震災後、復興支援の一環として大船渡港に20フィート型リーファーコンテナ

平野ロジ

保冷・常温スペースを分割

空調車、仕切り板を活用

平野ロジスティクスは、空調車の貨物搭載スペースで断熱仕切り板を活用することで、保冷スペースと常温スペースを分割、使い分けることを可能にしている＝写真。これにより保冷が求められる貨物と、一般貨物を混載できる。保冷貨物の搭載量が少なくても空調車をチャーターしなければならなかったような場合も、スペースを分割できるため、一般貨物との混載便として運行できる。チャーター運行と比べて、顧客にコストメリットを提供できる。

一般貨物との混載可能に

平野ロジスティクスは、96サイズコンテナ搭載可能空調車（最大積載量1万8000キロ）を2台保有している。主な仕様は、低床4軸、フルエアサスペンション、オートコンベア搭載。温度設定は、5～20度（温度記録計搭載）。

主に医薬品関連輸送の需要があるほか、精密機械、半導体関連輸送などの用途もある。コンテナ形状のまま保冷輸送でき、輸送や荷役の効率化、ダメージ軽減を可能としている。サイドから積み込みができるウイングタイプで、搭載時に荷役時も柔軟にオペレーションできる。

同社は、空調車の貨物スペースを完全に仕切ることができる断熱仕切り板を導入。同仕切り板は、貨物搭載スペース内を移動させて空調、常温スペースの容量を変えることもできる。

同仕切り板は、Safe-lock社（本社・横浜市）製で、平野ロジスティクスのオーダーメード。従来、食品輸送で同様のニーズが目立っていたという。

航空貨物輸送でも温度管理が求められる輸送ニーズが増加しているが、少量でも空調車を1台チャーターするケースも多い。平野ロジスティクスは、仕切り板の活用により、空調スペースと常温スペースを完全に区分けし、保冷貨物と一般貨物の混載を可能とすることで、コストメリットを提供する。

神戸港太陽光

ノー

が所有

運航船

今後は

航サー

お同社

のスペ

本一タ

るが、

イを直

ては唯

「N

800

イが2

アライ

3隻体

が、9

ーエイ

投入を

いエバ